

澤井勇教授に贈る言葉



澤井勇教授御退職に寄せて

実践女子大学名誉教授

伊藤 廣里

恙無くご退職の日を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。

英文学科研究室での学生指導、教育指導の中で一般教授が出来れば避けたいと思うような仕事から、神仏は澤井教授を遠ざけていたと思います。

英文学科研究室の同僚は、澤井教授は一番運の良いお方と羨望しておりました。

しかし同僚あるいは学生の両親の不幸に対するとき、その思いやりや法要に関する細やかなアドバイス、更に墨痕の美しい筆づかいは、先生が宗門のお方だけに示すことが可能な美しさがございました。

先生はまだ70歳、お若いです。ご専門のオスカー・ワイルドのご研究等に情熱をささげて下さい。

先生は「いいお酒」のお方ですから、その方面においても人生を大いにお楽しみ下さい。

澤井勇先生のご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。

平成21年8月11日

合掌

(編集委員注：伊藤廣里先生はこの原稿をお書きになられた4日後に他界されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。)

生きる —— ペイターとキーツ

実践女子大学名誉教授

高橋 雄四郎

かつて激務の理事長職に身をおき、文学研究との葛藤に悩まれたであろう澤井さん。ご定年に際し、何か一文といえ、ペイターとキーツの密なる関係を述べるのが、相応しいような気がする。

ペイターはいう、哲学的思考とは、生に目覚め、惰性から逃れること（ノヴァーリス）。人はみな執行猶予つきの死刑囚（ヴィクトル・ユゴー）なるがゆえに、短い一生をぼんやり過ごすのは愚かである。「この世の子ら」の中で、もっとも賢明なるものは、芸術と詩歌に生きる。人間の脈拍には限りがある。残された僅かな時間を生き抜くには、激しい情熱を、己の真の対象に集中させるがいい。芸術のもつ美は、過ぎゆく一瞬一瞬に、その最高の特性を求めるものに与えようと、明らかに意図している、と。

いっぽう、キーツは？

ぼくは心を動かす強烈な感情の神聖さと、想像力の真実がいには何も信じない—想像力が美として捉えるものは真に違いない—たとえ以前に存在しようがしなからうが。何故なら、ぼくはあらゆる激しい情熱について、愛と同じ考えをもっている。あらゆる激しい情熱は荘厳な状態になっていくと、みな美そのものを創りだすからである。

ペイターのいう激しい情熱は「知的高揚」に基づく。彼は、硬い宝石のような炎を、常に燃やしつづけることが、洗練された最高の感覚による感動の持続に繋がり、人は生の本質にちかづくと考ええる。

キーツのいうそれは「目覚めた心の激痛」と通底し、本質的美を垣間見させる。青春・美・愛は一瞬にして去る。ヴィーナス、アフロディテ、オインガスは眩しい。美は裏切り深い。そこにメランコリーがある。

クロノス（ギ神）＝サトゥルヌス（ロ神・土星）は時を司り、時間上のできごと全てを貪り食らう。その公転は遅い。土星の下には怠惰（メランコリー）がある。サトゥルヌスが老人の姿をしているのは、真の知識・叡智のアレゴリーである。

知的高揚、眼覚めた心の激痛は、生の本質ともいえる（メランコリーと響

きあう) 真の知識を目指す。

大らかで異彩を放つ澤井さん。ますます包容力ゆたかに、学究の道を歩まれようとなさる前途に、幸あれと祈って止まない。

澤井勇先生 —— 激動期の平静な司令官

実践女子大学名誉教授
鈴江 璋子

澤井先生は昭和46年、31歳の若き専任講師として、英文学科に着任された。当時の学科主任で、後に第六代学長を勤められた恩師桂田利吉先生の推薦による着任と記憶しているが、色白の、黒髪濃い、おとなしそうな文学青年に見えた。専攻が、詩でも演劇でも小説でもなくて、評論・随筆のパイターだということも納得できるように思われた。

当時の実践は英文学科の全盛期で、付設校からの志望率も、入試の成績も、就職率も、英文学科が学内で断然トップであり、実社会でも高い評価を受けていた。「英文学科出身」すなわち「できる女」だった時代である。当時学務部長として教学の実務を一手に引き受けられた藤原稔先生は、実践英文学科の勢いを一層パワーアップしようという熱い思いに、身も心も、弁舌も行動も、燃えたぎらせていらしたのだが、若き新人の澤井先生は早速この藤原先生に摑まり、鍛えられたに違いない。最初はなんとなく迷惑げな様子を見せていらした澤井先生も、その後、比較的早い時期に学生部長に任命されるなど、上位の方々の信頼を得て、じわじわと政治に目覚めて行かれたようである。澤の水が漣もたてずに大地に浸透していくように、澤井先生への人気と信頼は、学科を越えて、当時の教養部の若い助教授・講師の間にごく自然に広まって行った。

大学が全面的に日野キャンパスへ移り、教養部が総合教育へと移行し、それがさらに学科縦割りに改組されようという変動の時期に、澤井先生は英文学科主任に選出されていた。運命の急展開は、平成6年11月、藤原文学部長が病を得て任を退いた後、後任の文学部長に選出されたことに始まる。澤井先生は文学部全体を総括するとともに学長を補佐する、学部長・学園理事という要職に就かれたのである。私は澤井先生の後任として英文学科主任に選

出され、学部教授会のときには国文学科主任、美学美術史学科主任とともに議長である澤井文学部長の左右に並ぶことになった。人事、組織、カリキュラムをはじめ学部内に検討すべき問題は多かったが、澤井先生は緊張したり、熱を込めたり、苛立ったり、突き放したりすることなく、平静に、手際よく議事を進められた。「ご承認いただいたものとして処理させていただきます」という常用句がまだ私の耳に残っている。全学教授会や合同教授会のときは生活科学部長とともに学長の左右に着席されるのだが、そのときは目立たないようにしておられた。

そして平成10年4月、理事会決定を受けて、澤井先生は理事長に就任されることになった。お祝いのご挨拶に伺ったとき澤井先生は「私は何もしませんよ。何をしても、褒められることはないんだから」と言われた。せっかく理事長になられたのだから大いに何かをして欲しい、とそのとき私は思ったのだが、激動の時代に軽挙妄動せず—もちろん学部増設、創立百周年記念事業など多くの重要な仕事を完成させていらっしゃるのだが—あえて決定的な動きを避けようと決心されたのは、賢明な、とても重要な選択だったと思う。

澤井先生ご退職によせて

実践女子大学名誉教授
清田信子

澤井先生と初めてお会いしたのは、会のあと当時の桂田学長と3人でお茶を頂いた時でした。桂田先生からは、時々英文学の話聞かせて頂いていました。奥様もすてきな方で、ご自宅のマンションに伺った事もありました。もう30年以上前の事で、私が実践女子短期大学の英文科の非常勤講師をしていた頃です。

大学で教えるようになった時、先生には、そんなご縁でよく頂きました。その頃の先生は、近見先生とよくお酒を飲みに行かれていました。私も時々ご一緒することがありました。3人で、私は、コップ一杯位のビールを飲みながらお話をした事を思い出します。お酒を飲むと心臓が苦しくなるとお話しすると、そこを我慢しないと酒飲みにはなれないと話された事がありました。

清泉女子大学の学長をしておられる岡野治子先生がドイツ語の先生として来られた日の夕方、山脇先生、澤井先生、岡野先生と私で国立の桜見物に出かけ、山脇先生にご馳走になった事もありました。大学が厳しい時代になるすこし前の頃です。

お酒を飲まれて、2時間位酔いを醒ましてから、車でご自宅に帰られる途中、警察の検問にあったのに、おとがめもなく、無事帰られたと伺ったことがあります。今は大変ですが、その頃は、そんなふうに乗を運転している人がおられました。お酒も強く、運も強い先生ですが、かなり努力されておられたと思います。

先生のご研究のワイルドは、ドリアン・グレイの肖像、サロメ、幸福な王子、、、などよく読まれています。私は、坪内士行先生のサロメの授業を、いまもよく憶えています。オーブリー・ビアズリーの絵も若い学生には強烈だったのかもしれませんが。

大学で情報処理演習を教えていた私ですが、退職して3年、色々な本を読みたいと思っています。先生は、ご研究を続けて行かれる事と思いますが、お身体をお大切に、これからの長い人生をお過ごし頂きたいと思っています。有りがとう御座いました。

哲学者の眼を持った文学者 —澤井勇さんのこと—

実践女子短期大学英语コミュニケーション学科教授

遠藤 光

澤井さんがこの3月で退職されるということで、私にもエッセイの依頼があった。澤井さんについて真っ先に思い出すことは、院生の頃、よく飲みよく語ったということで、これに尽きると言ってよい。大学の先輩である澤井さんを紹介して下さったのは、澤井さんと私の共通の指導教授であった桂田利吉先生（元本学学長・法政大学名誉教授）で、「博士課程によく勉強しているのがあるから会って話してみなさい」と言われたのが最初で、それからは、時には桂田先生を囲んでよく飲み、よく語らった。桂田先生のたつての望みで、院生たちによる Herbert Read 読書会のメンバーが市川市真間の私のア

パートに集まってしたたかに飲み語らった無礼講は、私の青春時代が一番愉快な思い出である（写真はその時のもの）。しかし、桂田先生が亡くなられ、それぞれの仕事が忙しくなってからは、中々お会いする機会も少なくなり、記念会だの葬式だのという以外、お会いする機会は減法少なくなった。その代わりに、年に5、6回、長電話（大抵は一時間くらい）を下さるので、親交は続いてきたことになる。



澤井さんについて羨ましいのは、文学のみならず、哲学・美学についても大変ご造詣が深いことだ。澤井さんに哲学・文化人類学の手解きをなされたのは、その頃法政大学で教鞭を執られ、後に明星大学教授でいらした、いまは亡き村松仙太郎先生で、酔えば必ず出る名前である。1990年の2月頃に、澤井さんはホルブルック・ジャクソンの名著、『世紀末イギリスの芸術と思想』を名訳出版された（松柏社）のだが、その記念会で、最初で最後、一度だけ村松先生とお話する機会があり、「いま良寛に夢中でして」と言われ、先生がフィールドワークで宿泊される旅館の在る町（新潟県南魚沼市六日町）が私の出身地だというだけで、私にも目を掛けて下さったことが思い出されるのである。澤井さんのことを弟のように可愛がっておられたことが、村松先生のお話の隅々から伺われ、羨ましかった。

澤井さんの学部論文は George Bernard Shaw であったのだが、修士課程に入学するにあたって、もっとご自身に切迫する作家を求められて、あの分厚い齋藤勇の『イギリス文学史』（1957年版？）を再度熟読し、得たのが、Walter Horatio Pater であったと伺った。以後は哲学と美学を踏まえた重厚な研究論文を次から次へと発表され、日本ペイター協会でも毎回のよう口頭発表をなされた。澤井さんの口を衝いて出た名前を挙げると、深田康算、和辻哲郎、阿部次郎、ヘーゲル、ニーチェ、ショーペンハウエル、西田幾多郎、木田元、中村雄二郎、柄谷行人、プラトーンなどであった。哲学に疎い私など、足元にも及ばなかった。

昭和50（1975）年の頃だったか、桂田先生が48歳で翻訳された S. T. Coleridge の『文學評傳』（思索社、1949）が、全体の3分の1ほどの抄訳であったことと、表現も古くなったということで、「皆で全訳をやろう」と桂田先生が

言い出され、思い切って皆でやることになった。古今の英書のうちでも *Biographia Literaria* (1817) は難解晦渋な書として有名であったので、皆気合を入れて、うんうん唸りながら何とかそれぞれが下訳をやり、それを持ち寄って何度も桂田邸で検討を重ね、仕上げた。最後に桂田先生は、実力ナンバーワンと思されていた澤井さんに、全巻を通読して、おかしな箇所があったら指摘し、それを各分担責任者に再考してもらうという大仕事を託された。大分指摘された者もいたようであったが、私は一箇所だけだと言われ、褒めて下さった。安堵すると同時に嬉しかった。澤井さんの英文読解の力はやはり凄いと改めて思ったものだった。

翻訳の話が出たついでであるが、2007年に筑摩書房より『ウォルター・ペイター全集』(全3巻)の第2巻が出版されたが、その中で澤井さんは「プラトンとプラトン哲学」を翻訳なさっておられる。最初から日本語で書かれたのかと思わせる名訳であることを紹介しておきたい。

澤井さんがその後、文学部長や理事長、日本ペイター協会と日本ワイルド協会の会長になられたことなどについては、その方面の方々に触れられるであろうから、ここでは省略したい。それよりも私が大事に思っているのは、澤井さんの人となりである。澤井さんは、早くにご両親を亡くされたため、人生行路には常に一抹の哀感が伴っていて、それがまた魅力となって人を引き寄せることになる。澤井さんは常に一步下がった位置から物事を見据えるという、哲学者に独特な鋭く重い心で人間世相を見詰められる。従って、人を見る眼が一層厳しく、小賢しくて要領がいいだけで力や実のない人や、利己的すぎる人間、二心ある人間が大嫌いである。そうでない人には満腔の信頼を寄せることになる。人を見抜く力は恐ろしいほどだ。

澤井さんのことだから、退職されてもご研究は益々盛んになさるであろう。これまで書き続けてこられた論文も相当な数に上っておられる筈である。これらを何冊かにまとめられて、できるだけ早い時期に出版して欲しいものである。しかしその合間には時々また昔のように軽く飲みながら語りたいものです。澤井さんに出会えたことをただただ感謝している次第である。どうかご自愛ご専一に。

粹に生きる師

和光大学表現学部准教授

中 田 崇

ワイルドやペイターについての仕事が、研究者としての澤井先生の真髓であることは言うまでもありません。先生の学問分野での業績はあまりにも大きすぎて、私のような弱輩が語るのはいくらも無理があるというもの。そこでこの文章では、普段着の澤井先生の思い出から、特に印象に残る光景や場面を振り返ってみようと思った次第です。

記憶のスクリーンに映る一つ目の場面は、先生が理事長になられて最初にお会いした、雨の日の駐車場です。帰り際に澤井先生とバッタリ。先生は愛車の中に私を招き入れてくださいました。するとこちらが「おめでとうございます」を言うより前に、先生はそこに至った経緯を言いにくそうにお話しになりました。何となく弁解するような口調が続いた中で、一つたしかに明言されたのは、「卒論ゼミ」と「3・4年生の演習」の担当は続けるということ。短い言葉でしたが、教師であることの誇りが伝わってきて、胸が熱くなりました。

先生との思い出となると、何と言っても晩夏の仙石原のゼミ合宿です。毎年のようにセミナーハウスの部屋の鍵を持ち帰ってしまう澤井先生。圧倒的な人間的魅力で難波ゼミや中田ゼミの学生すべてを虜にしてしまう澤井先生。その一方で、我々に自分のゼミ生を預けて一足先にヒョイと相模原に戻ってしまう澤井先生。小雨降る芦ノ湖畔で心にしみる一句をさりげなく詠んでしまう澤井先生。

澤井先生が文学部長の頃、会議の後は日付が変わってから帰宅することが続きました。桜が満開の井の頭公園に始まり、立川、国分寺、吉祥寺…と、本当に楽しい日々でした。いろいろな話をうかがい、いろいろな歌を拝聴しました。難波先生と私は中央線に近かったので、相模原の澤井先生より先にタクシーを降ります。先生はどんな時間でも、外で見送る我々に、走り出したタクシーの後ろの窓から笑顔で手を振ってくださいました。そんな先生の笑顔を見て、我々も幸せになるのです。

先生の言葉で特に心に残るのは「無粋な！」です。若僧が分不相応に体裁

や見栄から格好をつけようとする、先生の「無粋な！」が発動されます。あの一言でどれだけ精神的に(そして経済的に)助けていただいたことでしょうか。先生のように「粋」になるのは難しいですが、せめて「無粋」と呼ばれないように心がけていきます。「粋」は「粋になろう」として身につくものではないですから。

この春、澤井先生が一つの節目を迎えられるとのこと。責任の重い職務を歴任されたご苦勞はとも想像できるものではありません。しかしこれをゴールにはしないでください。これからはもっともっと自由な立場で文学の研究や後進の指導にあたっていただきたく存じます。澤井先生、本当にありがとうございました。そしてこれからもどうぞよろしく願います。

末筆ながら、退職した元教員にこのような機会を与えてくださった実践女子大学文学部英文学科の皆様へ心より御礼申し上げます。

日本ギヤスケル協会のご縁で

実践女子大学非常勤講師

多比羅 真理子

イギリス、ヴィクトリア朝期の女性作家エリザベス・ギヤスケル(Elizabeth Gaskell)を研究するため、1988年、実践女子大学の先生方の強い御支援のもと日本ギヤスケル協会が創立された。3年後の1991年に学会の命綱ともいべき学会誌を発刊することになった。『ギヤスケル論集』というその名付け親、そして創刊号から第三号までの編集責任者は澤井先生であった。創刊号発行に際し、私は編集委員の一人として、先生の研究室にお尋ねしいろいろご相談し、ご指導いただいたことを今でもはっきりと覚えている。編集作業に関わるのは全く初めての私を前に、印刷所の決定から表紙の色、紙の種類、加えて表紙の字体、さらには奥付作成に至るまで、てきぱきと率先して『ギヤスケル論集』の作成にお力を注いでくださった。その時選んだ表紙の字体は、第18号まで変わることはなかった。2008年、会の創立20周年を記念して字体を少々大きくするという変更がなされたが、表紙の紙質、色、レイアウトは創刊当時から全く変わっていない。現在ギヤスケル協会の運営に携わるようになった私には、この時の経験は大きな財産となっている。後に文学部長に

なられた折にギヤスケルの幹事を退かれたが、『ギヤスケル論集』のみならず、創生期のギヤスケル協会の礎を築き、その成長に大きなお力を注いでくださった澤井先生に感謝で一杯である。

最近3月の謝恩会の席以外お目にかかることはなくなったが、ある時、先生が別珍のジャケットをお召しになって出席されているのに気づいた。加えてたたずまいも先生がご研究を続けられるオスカー・ワイルドに年々似て来られるように感じられて仕方ない。これからは様々なご校務から解放され、ワイルドのように『人生の美』を求めてお過ごしになられるのだろうか。

澤井先生 ありがとうございます。

実践生を大切に、卒業生を大切に

実践女子大学人間社会学部人間社会学科准教授

阿佐美 敦子

「実践生を大切にしてください、卒業生を大切にしてください、それが大学を、ひいては学園全体をより良くしていくことだから」とは、以前からしばしば、そしてつい最近も澤井先生より頂戴したお言葉です。

私が大学英文科に入学後、1年次の担任教員としてお世話くださった澤井先生は、学生たちに決してご自分の価値観を強要なさったり、お説教なさるわけでもなく、一般にいわゆる上から目線の指導スタイルが少なくなかった当時において、何につけても私たちが発言しやすい雰囲気作りを心掛けていらっしゃるようにお見受けしました。ご幼少の頃の苦勞話、学究の道に入られてからの諸々、文学、哲学、芸術について、教室の内外を問わず色々とお聞かせいただいたことを懐かしく思い出します。

平成16年4月、澤井先生、また飯塚前学長を始め、多くの皆様のご尽力によって開設された人間社会学部人間社会学科の教員となり、受けたご恩をお返しする立場となりました。一人一人の心に目を向け、それぞれの成長を愛情を持って応援する、そうした温かい関係を学生たちと築いてまいりたい、さらには卒業生たちと連携を取り合い、在校生とパイプをつなげてまいりたい、本学科はもとより全学園の発展の一役を担ってまいりたい、このように願う毎日です。

私は、澤井先生のお導きを持って教員という仕事に就かせていただき、学生を大切にできる気持ちを持つことができました。ご退職にあたり、改めて心からの謝意を表したいと存じます。ありがとうございました。

先生、大変ごちそうになりました！

北里大学・東海大学非常勤講師

関 口 章 子

四年生の時、なぜだかわからないが、妙な噂が流れた。「澤井先生は、美人しか相手にしてくれないんだって。」容貌に自信のない私は、すっかり困ってしまいました。何しろ、先生のお宅と我が家とは近所である。近所のよしみということで、大学院に進んでからは、いろいろお話をさせていただいて大いに盛り上がりたいと、勝手に思っていたのである。

晴れて院生になり、「噂はうわさ」と気にしないつもりでいても、やはり気になって、初めて先生とお話をさせていただける機会に恵まれたというのに、研究室の戸口のところでもじもじしていた。なのに、その時一緒にいた友人は、先生に親しげにべらべら話しかけている。彼女の話が一段落したので、恐るおそる……「あの、先生、私、家近いんです。」「え？相模原なの？」「はい。」「……やはり、噂はうわさである。先生があまりにお洒落でいらしたので、気後れた学生たちが、そんな気持ちの整理に何か理由をつけただけだったのかもしれない。それからもう、近所のよしみである。いや、近所であってもなくても、院生一同、それはそれは楽しい「うたげ」の日々であった。他の先生方と飲んだり食べたり記憶は、残念ながらほとんどないのだが、澤井先生とは、むしろそればかり。そして、そのノリで「箱根お泊り旅行」まで敢行してしまったのである。

芦ノ湖のほとりの、バブル絶頂期にはかなり地味な、公立高校の校舎のようなホテルで、再び宴が催された。さっさと食事が終わってからも、ビールに日本酒、ワイン……皆ですいぶん空けたように思うのだが、私ばかりが飲んでいたのかもしれない。先生は、『イスラーム』について語られていて、私は「こういうシーンこそ、大学院の醍醐味。浴衣、アルコール、知性……。」と酔っ払いながら嬉しくて、そのお話は全く聞いていなかった。翌日、

美術館に寄り、大涌谷を散策して、お礼と称し、お昼に皆で先生にカレーをごちそうしてさしあげた。先生は「大変ごちそうさまでした。とてもおいしかったです。」とおっしゃって、深々と頭を下げられた。

大学院を終え、先生からのお話で非常勤のお仕事をいただくようになってからも、私は、それこそ近所のよしみで、それはそれはたくさんごちそうになった。

きちんと頭を下げ、お礼を申し上げたことがあっただろうか。「先生、遅ればせながら、大変ごちそうになりました。ありがとうございました。」



澤井先生出版記念会にて（後列左から関口章子さん、永嶋昌子さん、中村みどりさん）

Mr. ダンディ 澤井勇先生へ

産学官連携コーディネータ

永嶋昌子

今年1月、澤井先生の最終講義を聴講いたしました。先生の変わらぬ朴とつとした語り口に懐かしさを覚えながら、私には呪文のようにいつも頭の片隅にある「あるがままに見る」というフレーズを、久しぶりに紐解くかのように興味深く聴き入りました。歳月の流れの早さへの驚きと共に、私の母校での様々な思い出が駆け巡ります。先生は常に私達学生のことを在学中から卒業後までも大切に気にかけてくださり、また研究においては多角的な見地からのアプローチの意義を教えてください、そして何より実践女子大学生であることの誇りを教えてくださいました。

私は学部2年まで日野寮生でした。現在の香雪記念館のあたりに寮がありまして、学生の皆さんには今では考えられないでしょうが、当時は4人部屋で、お風呂やトイレ等は当然共同、エアコンもありませんでした。時代的にも一人部屋が主流になりつつある時期でしたので、先生は日頃から寮生のことを気にかけてくださり、寮で開催する行事には「日野寮のパパ」として、いつも必ずご出席下さいました。地方出身の寮生達にとっては、学内にこのように気遣って下さる先生の存在はとても有難く、心強いものでした。

私は大学院へ進むにあたり、研究対象作家の変更（W.ブレイクからD.G.ロッセティへ）を希望していました。これは指導教官が変わることでもあり、余り例がないことでした。しかし快くお引き受けいただき、さらには多くの大変貴重な文献を図書館で購入していただきました。司書の方から「活用するのはあなたしかいないのだから、澤井先生に感謝してどんどん研究なさい。」と叱咤激励をうけたものです。お陰様で修士論文は苦しみながらも、本当に楽しく充実して纏めることができました。その論文に添付した「祝福されし乙女」の写真を額に入れて、先生にプレゼントさせていただいたのも懐かしい思い出です。

先生は、前例がなくとも必要であれば創るというお考えで、母校の伝統とこれからを生き抜く実学の意義をご教示下さる存在でした。私はいつもいつも前例のないことばかりで、ご迷惑をおかけしてまいりましたが、ご指導ご

配慮いただきましたことに改めて深く感謝申し上げます。先生のご退官は大変残念ですが、ご研究に専心される時間の始まりでもあるかと存じます。ますますのご活躍をお祈り申し上げます。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

追伸：今回は後輩も手にする記念号なので、先生のお茶目な話や脱線話は封印しておきました（笑）。

澤井勇先生と大学院時代の思い出

東京農業大学非常勤講師

長 浜 麻里子

私が実践女子大学の大学院で学んだのは、いまから18年ほど前のことになるが、澤井勇先生はそのときから変わらない。ロマンス・グレーの御髪はかなり白くなられたけれど、いまなお、ダンディな紳士でいらっしゃる。当時、私はジョン・キーツの詩作について書こうと決めていたので、修士論文の主査は高橋雄四郎先生、澤井先生は副査を担当して下さいました。

大学院での澤井先生のご講義は、ウォルター・ペーターの『ルネッサンス』やハーバート・リードの『禅と芸術』などの芸術批評を通して、物の認識の方法や鑑賞態度について学ぶことであった。私は自分のテーマと大いに関連があるように思われて張り切っていたが、テキストは難解で大変むずかしかった。しかし先生の授業は不思議なほど堅苦しいところがなく、いつも和気藹藹とした雰囲気で行われていた。先生は時折ご自身の論文の抜粋やご著書をくださり、院生それぞれのテーマに沿って示唆して下さいました。たとえば私の場合なら、「…これはキーツの詩に‘Ode on a Grecian Urn’というのがあったね…」という具合に。

その頃受講していた院生は7、8名いたであろうか。みな研究対象は異なっていて各々自由にやっていたが、私どもはよく日頃から院生同士のつながりを大切にしなさいと教えられていた。ときどきお食事をご馳走になり、一度などは夏に箱根で合宿したこともあった。傍から見ればさぞや可憐な女子大学（院）生の一団だったと思うが、みな大いに食べ、大いに飲み、意外に豪快であった。このときの院生のほとんどが中・高・大学の教壇に立ち、いまで

も学会や研究会などで再会している。

私は院生の頃から実践女子学園高等学校などで講師として勤めていたが、一度出産・育児のために退職したことがあった。しかしその数ヶ月後に、森岡弘道先生、鈴江璋子先生、そして澤井先生からある女子短期大学の非常勤講師の職を勧めていただいたのである。大学院を修了して数年経っていたにもかかわらず、先生方からこのようなご連絡をいただいたときは、なにか大きな励ましをいただいたような気がして、大変ありがたく思われたことを覚えている。その後、いくつかの大学で教職および研究の道を続けている。

澤井先生、長い間大変お疲れ様でございました。実践女子大学大学院時代は楽しい授業と思いを、そして大学院修了後も親身な助言と励ましをいただき、本当にありがとうございます。先生にはますますのご健康とご活躍をお祈りしつつ、これからも私たちの先生でいてくださるようお願いしたいと思っております。

澤井先生の授業から

実践女子大学非常勤講師

宮 上 久仁子

澤井先生が担当なさいました数々の授業から、わたしは大学の勉強の本質を学びました。それは英文学の研究方法だけでなく、研究に従事する心構えも多くを教えて頂きました。

ひとつに、学部一年生で受講した英文学概論で、当初は高校時代の名残から、澤井先生が時折、板書されることをノートに記しておりましたが、ただ聴いているのではなく、次第に御講義の内容を自らノートに取ることを覚えました。その体験が、大学では意識を働かせて能動的に勉強するものだという自覚を持つ機会となりました。

澤井先生は英文学史における代表的作家および作品を年代順にご説明なさると同時に、各時代の風潮や作家個人のエピソードを分かり易くお話くださいました。澤井先生のユーモアのあるお話しぶりに、教室内から笑い声が沸き、90分が瞬く間に過ぎて、次週の御講義がいつも楽しみな授業でした。

また毎月決められた作品に関するレポート提出があり、その月の課題文を

書き終えると、息つく間もなく次の課題へと取り掛かっておりました。しかし、その課題全てが、英文学科生として最も重要な素養を積むための貴重な機会だったことは言うまでもありません。

さらに修士課程在学中、澤井先生の T.S. エリオットの評論に関する御講義では、作品そのものを丁寧に読むことの肝要さと、作品の主題を一貫して考える姿勢を学びました。

院生当時、わたしが背景知識も不十分なまま、エリオットの難解な表現に四苦八苦し、稚拙な発表をしてしまった時、澤井先生はやり直す機会をくださいました。至らぬ点をご指摘くださいましたが、励ましてくださるようなお気持ちが伝わって来ました。再度、発表を終えた時には、あたたかいお言葉で労ってください、本当に嬉しかったことを思い出します。

難しいものも一文ずつ着実に読み、文脈を手がかりに全体像を考察するという技術面のみならず、諦めずに考えれば必ず理解に到達できるとの、粘り強さも教えて頂きました。

澤井先生の数々の授業で、自らを発奮させて課題に取り組み、英知に触れた時の充実感を今も鮮明に思い出します。自分から積極的に取り組んだ結果、得られる喜びや達成感の素晴らしさを、いつまでも忘れずにいたいものです。澤井先生、本当にありがとうございます。

ワイルドと、ペーターと

元実践女子大学英文学科助手

岩 城 光名子

澤井先生にお会いしたのは、オスカー・ワイルド研究をご指導いただくために実践女子大学大学院に入学したときである。ある特定の文学作品・作家が、それを研究されている先生方の性格をそのまま反映しているわけではないということは、学生はもちろん知っている。それでもやはり、講義を受けるといことは、先生方と作家との関わり合いを目の当たりにし、そこから先生方自身についても理解するという過程も含まれるのではないだろうか。

著名なイギリス世紀末文学批評書の訳者であり、ワイルド学会においても重要な役割を果たされていたために、ダンディズムなどの世紀末文学におけ

るキーワードによって、お会いする前から人物像を作り上げるのは容易であった。想像通り、先生はゆったりと椅子に座って面白いお話を聞かせてくれるワイルドのような方であったが、しかし、講義を拝聴するうちに、ワイルドの師であり、哲学・芸術批評家であるウォルター・ペイターを支持し、哲学のみならず仏教にも精通し、真摯な姿勢で芸術批評に取り組むという一面を垣間見た。大学院で澤井先生にご指導いただくきっかけとなったのはワイルドの作品であったが、先生のお人柄について更に知るきっかけとなったのは、ペイターの作品を通してであった。私から見た先生はダンディで冗談もお好きな方である、と同時に、とても真面目なお人柄である。当時その二つは両極で相容れないもののように思っていたのだが、今ではそれが同居し得るものであることが分かっているし、それが澤井先生である、ということが出来る。このような思いは、修了後助手として先生の講義を聴講させていただく間に、さらに深まっていった。

今思い返してみると、専門用語や訳文について先生から受けたご指摘は、意外なほど正確に覚えている。けれどあの時学んだのはそれだけではない。大袈裟ではなく、人生に対する態度もまた学んだのだ。澤井先生にお会いすることが出来て、心からよかったと思う。これからも引き続きご指導願いたい。



授業をしていらっしゃる澤井先生 (2009.12)
「なんだってえ？ この“make”の用法はねえ……」

澤井先生

平成12年度実践女子大学大学院修士課程英文学専攻修了

一 井 由希子 (旧姓 大西)

澤井先生が今年度でご退職されるということを知って、私は何年も学校に顔を出していなかったにもかかわらず、ただたださみしい気持ちでいっぱいでした。時の経つことも忘れて、学校に行けば先生はいつでもいらっしやる、と無意識に安心していたのだと思います。

けれども、先生がこれまで長い間、実践の先生であり、研究者でいらっしやることをあらためて考えてみれば、心より尊敬の気持ちがあふれるとともに、本当におつかれさまでしたという思いでいっぱいです。

それにしても、こんなにさみしいのは、先生が立派な先生でいらっしやるからというよりも、どんなに立派でも偉ぶったところがなく、うれしそうに冗談をおっしゃり、おっしゃったあとに恥ずかしそうに笑って、そしていつも穏やかで、とても深い心をもっていらっしやる、そんなお人柄のせいなのでしょう。だから先生のファンがいっぱいだったのですね。

澤井先生のことを想うとき、私の中には先生の少し低い、優しい声と、落ち着いたテンポの口調が響きます。先生の授業は私にとって、「授業」というよりむしろ「お話」と言う方が合っていた気がします。ペイターやワイルドをはじめ、さまざまな文学作家や作品についての授業は、先生が話されると、とても心地よく耳に入り、いつも色々な方向に広がり、また先生ご自身の生き方や考え方がたくさん感じられたように思います。「あるがままに見ること」の大切さ、「幸せは人から与えられるものではなく、自分でつくるもの」。先生が話されたことは今でも心に残っています。今まで先生の授業を受けた方、一人一人の中にも生き続けていることと思います。

多感な十代から二十代にかけて、先生のお話をたくさん聞かせていただけたことをとても幸せに思っています。そして思いがけず少し長く過ごさせていただいた時間をととても大切に思っています。これからもずっとずっとお元気でいらしてください。本当にありがとうございました。

思い出の講義

元実践女子学園生涯学習センター講師
元東京女子学園非常勤講師

原 範 子 (旧姓 菊池)

13年前、大学一年の春、200人近く入る講義室で、これからどんな講義が始まるのかしら、と不安と緊張の中、教壇の横の扉が開くのを待っていました。そこに入っていらしたのが、バリッとしたスーツ姿の澤井先生でした。マイクを持ち、授業が始まった途端不安は消えました。エネルギーで、テンポよく、それでいてとても丁寧な、そして時にはユーモアを交えながら軽快な語り口で教えてくださいました。しかし、ただ面白いだけではありませんでした。作品の内容を紹介するだけでなく、その背景にある歴史や文化、そして哲学など、知る楽しさ、考える楽しさを、教えてくださいました。次第に私は授業に引き込まれるようになりました。これは私だけではなかったと思います。まもなく尊敬していた澤井先生が理事長になりましたが、そのことがどこか誇らしく、嬉しく思ったのを覚えております。

その後、私は大学院に進み、澤井先生の講義を一对三という少人数で受講させていただきました。先生の授業は、作品を単に普通に訳していくというものではなく、時間をかけてじっくりと精読するものでした。前置詞一つをとっても、「他に良い訳し方はないかな」、という先生の一言から、皆で辞書を引き合い、より良い言い回しがないか話し合い、言葉を選んでいきました。また、哲学的な質問を投げかけてくることもあり、一日で進む量が少ないこともありましたが、逆に、言葉、文章、そこから生まれる思想など、一つ一つを熟考していく大切さを学び、とても濃く実りある時間を過ごすことができました。このような贅沢な時間を過ごせたことは、私にとって大変貴重な経験です。有り難うございました。

今年度で澤井先生がご定年退職されるということで、私が受講できたような講義を、これから先の学生は受けることができないのかと思うと非常に残念で、寂しいですが、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

澤井先生、ありがとうございました

平成16年度実践女子大学大学院英文学専攻修了

伊 藤 由香里 (旧姓 馬把)

四年生のゼミから大学院まで澤井先生にご指導いただきました。当時、先生は理事長でいらっしゃったため、理事長室のある事務棟から本館へ向かってゆくりと歩いていらっしゃるお姿を教室の窓からよくお見掛けしたことが授業前の緊張感とともに懐かしく思い出されます。

澤井先生の授業では、一語一句、言葉の意味を正確に捉えることが求められ、辞書と悪戦苦闘しながら、どのような日本語に訳そうかと真剣に考える時間でした。的確な言葉がなかなか思い浮かばなくても、先生は根気強くご指導くださいました。英語で書かれた文章を美しく自然な日本語で表現するためには、辞書のみならず、日頃から様々な言葉に触れて語彙を豊かにすることの大切さを痛感し、また実践する訓練の場を与えて下さったように思います。

時にはテキストから脱線した話題になることがあり、予習に自信の無い日には(いえ正直、毎回)密かにその時を楽しみにしていました。ある時、大変な苦勞をされた若いころの体験を話してくださり、人生に一度ぐらいはがむしゃらになる経験をしたほうがよいのではないかというお考えを、ポツリと話して下さったことがあります。このお話を今でもふと思い出す時があり、仕事につまずいたときの励みようになっております。

大学院での2年間は、社会に出てからでは決して経験することのできない充実した貴重な時間であり、文学とはほとんど関わりのない場所で働いている現在でも大きな糧となっています。

末筆になりましたが、これからもお元気で、お洒落な先生でいらっしやってください。また、ますますのご活躍を心からお祈りいたします。



澤井先生と平成16年度修了生

現在・過去・未来

植野達郎

このたび定年退職を迎えられる澤井先生からは、私が本校に着任して以来、20有余年にわたっていろいろお話をうかがってまいりました。実践女子大学の歴史、英文学科のこと、あるいは文学や思想についてと話題は多岐に渡りました。先生が小説や思想について語っていた時は、ほかの話題について述べる時よりも力がこもっていたように私には思えます。それはおそらくそれらの話題が先生の根本的な関心の的であったことを物語っているのでしょうし、その場に居合わせた人々が共有していた関心事であったからでしょう。それはまさに、饗宴とってよい時空間であったと思います。しかし、そのような濃密な時間を持つことができたのは、先生が役職に就く前までのことでした。そして、そのころ先生とご一緒したお店も今では記憶の中にだけ存在するようになってしまいました。

先生が力を込めて語っていたもう一つの事柄が学園に関する事でした。その事柄を語る時の先生は、実践女子学園を「愛する」ことにかけては人後に落ちないという自負をお持ちであったように私には思えます。自分の勤め先に愛着を覚えない人はいないでしょうが、先生の実践女子学園に対する思いの深さは私が想像する以上のものであるように思えます。しかし難しいのは、その思いをどのように表現するのかということです。先生が役職に就かれたときになされたことの中に、その思いは表わされていたのでしょうか。

先生とお話しした時間は決して多いとは言えませんが、お話ししたことを思い返すうちに、改めて文学や思潮に対する先生の思いがよみがえってきます。とともに、薄れつつあるように思える文学や思潮に対する関心を、学生たちが持つことに微力を注ぎたいと思います。そして先生と文学談義を楽しむ日がくることを願っております。

澤井先生を送る言葉 いつまでも若々しく

小 柳 康 子

澤井先生がご定年となられて英文学科を去られることになりました。先生は学園全体の責任あるお立場を離れて英文学科に戻られた後も、学科のありようについて大きな場所から建設的なご意見を述べてくださり、本当に感謝いたしております。



私が澤井先生とはじめてお目にかかったのは、12年前、実践にお世話になることが決まった1997年でした。その年は私の所属する「イギリスロマン派学会」が実践で開催された年で、そのレセプション会場でお会いしたのです。話の内容は詳しく覚えておりませんが、とても穏やかなお人柄の先生とお会いして、翌年から始まる新しい仕事への不安が払拭されたことだけは強く印象に残っています。

英文学科のスタッフとなってからの数年間は、パーティー後の二次会にご一緒させて頂く機会も多くありました。文学の様々な領域の話題を縦横無尽にお話くださる先生と楽しい時間を共有できたことが思い出されます。とくに文学作品における「文体」の重要性についてのお話は忘れることができません。また先生は、ワイルドやペイターなどイギリス19世紀末文学のご専門でいらっしゃいますが、プラトンなどの古典から芥川賞を取った新しい作家についてまでのご造詣も深く、そのお話をお聞きするのも楽しいものでした。

お洒落でダンディな先生は、女子学生からの人気も高く、シニアの鏡のような男性です。文学とご家族とお酒を愛する澤井先生、ご退職後も今と変わらず若々しくお元気で、充実した時間をお過ごしください。長い間のご指導、本当にありがとうございました。

澤井先生であることの大切さ

島 高 行

ある若手のすぐれた英文学研究者と会う機会があり、自分が実践女子大学の英文学科の所属であると自己紹介すると、彼の返事は「ああ、澤井先生のいらっしゃる場所ですね」というものでした。なるほど、実践女子大学の英文学科とは「澤井先生のいらっしゃる場所」なのだなと、先生の存在をあらためて認識させられたことでした。

とはいえ、澤井先生とはゆっくりお話する機会はほとんどありませんでした。私が実践女子大学に奉職することになった年に、先生は理事長に就任され、学科会議でもお会いする機会がほとんどなくなってしまったためです。専任講師になったばかりの人間にとって理事長というのは雲の上の存在でした。しかし澤井先生の存在を痛感させられたのは、それまで先生が担当されていた科目、特に「英米の文化と社会」という講義科目を担当することになった時です。1年生から4年生まで、さまざまな学生が大教室に混在するこの講義科目には本当に苦勞させられ、退屈そうな学生さんをいかにして授業に引き込むことができるか悪戦苦闘したものです。この授業のおかげで、新米教員の私は本当に鍛えられたと思います。そんな中で思ったのは、澤井先生であればどのような授業をされたであろうかということでした。不在の先生を意識しても仕方ない、自分なりにやるしかないという覚悟を決めるのは後の話です。しかし、そうした経験があるので、実践女子大学の英文学科とは「澤井先生のいらっしゃる場所」という発言が腑に落ちたわけです。

というわけで、澤井先生の存在の大きさについて語る資格は私にはありませんが、先生は困っている人に必ず手を差し伸べてくださる方でした。教務委員を担当していた時、授業に関する無理なお願いを快く引き受けていたことを今でも感謝しております。どうぞお元気で。またゆっくりお話しさせていただく機会に恵まれますことを願っております。

澤井先生と福井

佐々木 真理

2004年に本学に着任した私にとって、当時理事長でいらした澤井先生は大変畏れ多い方であり、研究室がお隣同士であるにもかかわらずご多忙の澤井先生にお会いする機会は少ないこともあって、なかなかお近づきになることはできずにいた。だが、あるとき、澤井先生が福井県のご出身であることを伺って以来、誠に勝手ながら親しみと懐かしさを先生に対して抱くようになった。私も同じく福井県出身で、しかも、大変失礼ながら、先生のお顔立ちがどことなく私の亡き祖父に似ているのである。明治生まれの祖父は福井県庁に長年勤めた功績によって瑞宝章を授与され、定年退職した後も九十を過ぎて亡くなるまで志を持ち勉学を怠ることがなかった。世界少年少女文学全集を幼い私に買い与えてくれたのはこの祖父であり、今思えば、全集に収められていた『トム・ソーヤーの冒険』と『若草物語』を愛読したことが後にアメリカ文学の研究を志すきっかけとなった。さらには、先生がご卒業になられた高校は私の父親の出身高校でもある。人口のさほど多くない福井のことである。必ずどこかで澤井先生と私の祖父や父は一度はすれ違ったことがあるにちがいない。このような勝手な理由で親しさを感じていたのは、だが、私の側だけではなかったようで、ある飲み会の席で先生に私の結婚する前の旧姓を聞かれたことがあった。どうやら、先生のお知り合いの方と私の顔立ちが似ていたらしい。先生の方でも、私が福井出身ということで、福井人らしさ(?)を私の中に見出してくださっていたようである。

お隣の研究室から学生を優しく熱心に指導される澤井先生のお声を漏れ聞くことはもうないと思うと寂しい気持ちになるが、最後に、これまでいただいたご指導に深く感謝申し上げると同時に、先生のますますのご活躍と御健康を心よりお祈り申し上げたい。

澤井勇先生、お世話になりました

村 上 まどか

本学に私が着任し、学園理事長と英文学科教授が同一人物であることに目を丸くしてから、もう5年—おそろおそろ接していた当時から、失礼にあたるほど打ち解けてしまったかもしれない今まで、澤井先生には大変お世話になり、ありがとうございます。

「おそろおそろ」というのは誇張ではありません。私は着任と同時に、たまたま知人が持っていたマンションを借りて引っ越してきたのですが、なんとそのマンションは、目の前の実践女子短大の一角にコンビニが建設されることに反対で、学園理事会ともめているという話でした。それを聞いた私は、澤井先生には自分が住んでいるところを伏せておこうと、用心していたわけです。

4月1日に辞令を拝受してから数日後、歓迎会にてさっそく澤井先生と酒席をご一緒しましたが、話がそちらに行かないようにハラハラドキドキしていた覚えがあります。

予定より遅れながらも、コンビニは出入り口の向きを変えるなどマンションの要求を受け入れて建設され、近隣の住民は便利に使わせていただき、私とそのマンションを後にした今となっては、思い出し笑いの種となっております。

さ 颯爽として
 わ 若々しく
 い いつまでもお元気で
 い いつの日にか
 さ 再会して
 む 昔話などいたしましょう

心に残る静かな激励

稲垣伸一

私は実践女子大学英文学科に採用されてまだ4年目なので、澤井先生に初めてお会いしてまだ日が浅いといわざるを得ない。しかしこの4年間で振り返ると、短いながらもかなり濃い密度でお付き合いしていただいたと自分では勝手に思い、先生には感謝している。

日頃は先生もお忙しいため職場でじっくりお話しする時間はそう多くはなかったように思うが、それでもお互いの空き時間が一致したときなど先生は私の研究室に時々いらしてくれて、世間話から始まり、実践女子大学の昔話などを聞かせてくださった。少しでも早く新しい職場に慣れようとする私にとって、日常での先生との何気ない会話は貴重なものだった。そして自然と、残りの話しは好きなお酒を酌み交わしながら、ということになるわけだ。

澤井先生とじっくり話し合った思い出として私の中で強く印象に残っているのは、私が初めてゼミを担当した年のゼミ合宿である。合宿は初めての私を気遣ってくださったのか、先生はスケジュールを合わせて同じ日程でやろうと声をかけてくださった。全員が女性である学生とまだ距離を測りかねている私にはありがたいお話だったので、喜んで合宿をご一緒させていただいた。予想通りというべきか夜には学生たちを交え楽しく歓談の一時を過ごしたが、夜中の12時を過ぎ会がお開きになっても、先生はご自分の部屋に戻ろうとせず、残ったお酒を私の部屋に持っていらした。そこで深夜までいろいろなお話しははずだが、酔いが回り内容はほとんど記憶にない。しかし私に対し先生が「自分の思っていることがあったら会議では積極的に



言った方がいいんだ。」というようなことを言ってくださったことだけは鮮明に覚えている。あの夜いただいた一言のおかげで、私は随分楽な気持ちで新しい職場に馴染んでいくことができたような気がする。蛇足だが、あの夜の翌日、自宅までの車の運転はか

なりきつかった。先生はいつも通りに平気なご様子で合宿所を後にされたが、短い間だったが、その後も澤井先生はいつも気さくに私と付き合ってくださいました。若造の生意気な言葉にも寛大に耳を傾けてくださいました。これからも私がダレている時には、あのゼミ合宿の夜のようにそっと叱咤激励していただきたいと心から思っている。もちろん杯を傾けながら。

澤井先生のご退職に寄せて

土屋 結城

縁あって平成19年4月に助教として着任し、平成21年4月からは専任講師として現在英文学科に奉職しております。縁あってと述べましたが、実践に来て以来、さまざまな縁を感じる事が多くありました。もともと実践の英文学科に通っていた親戚がいたこともあり、英文学科の校風や教育方針などには馴染みがありました。しかし、それだけではありませんでした。実践に着任する以前、北里大学の一般教育部で非常勤講師として英語を教えていたのですが、そこで瀬谷先生とお話をする事がありました。その際には、私なんか瀬谷先生とお話しするのは恐れ多いと恐縮していたのですが、実践に着任し、澤井先生と瀬谷先生が親しくされていたことを伺い、さらに不思議な縁を実感したものです。

澤井先生のご高名は着任する前から伺っておりましたが、初めてゆっくりお話する機会があったのは、学科の助手・助教の歓送迎会にてのことでした。実際にお会いしてお話をしてみると、とても気さくな方で、お酒も嗜み、私が申し上げては大変失礼なのですが、チャーミングな先生というのが私が抱いた印象でした。ご自分では口下手と仰っていますが、いろいろとお話させていただきました。中でも「とにかく本を読むこと」というアドバイスがとりわけしっかりと私の心には刻み込まれました。近年、文学研究において、理論と作品の二分法の是非が取り沙汰されることもあるように思いますが、基本は作品を、そして作品に限らず本を読むことしかないのだろうと折に触れそのときいただいたアドバイスが身を律してくれます。

今は残念ながら先生とゆっくりお話をさせていただく機会があまりありま

せんが、授業の際に、学生が澤井先生の授業であったことなどを話してくれるのを楽しんでいます。そして私も学生に触発され、こっそりと会議の際などに澤井先生の「ダンディ」でお洒落な服装を拝見したりしています。

ご退職後は、ライターかまたはまたワイルドの研究に専心されるのでしょうか。私も恥ずかしくないように研究を続け、本を読み、先生のご研究の一端でも吸収できるようにしなければと改めて襟を正す思いでおります。

澤井先生との思い出

遠藤花子

澤井先生のご講演を初めて拝聴したのは、高校3年生の時でした。当時理事長先生をされていた先生が、実践女子学園の中高で『幸福な王子』の講演をされたのです。今思えばこの時が初めて聞く英文学の講義でした。

そして大学で英文学科に進んだものの、澤井先生に初めて授業でお世話になったのは、修士課程1年生の時でした。先生はゼミをお持ちでしたが、私の学部時代は理事長先生をされていて、入学式や卒業式の時にのみお目にかかる先生でしたので、緊張して第1回目の授業を迎えました。一緒に授業を受けた馬把由香里さんは、オスカー・ワイルドについての修論を書こうとしていましたが、私は世紀末文学に興味を持っていたものの、知識はほとんどありませんでした。先生は、「馬把さんがワイルドで、遠藤さんがシェイクスピアだから、ワイルドがシェイクスピアについて書いたものを読もう」とおっしゃって下さり、ワイルドの *Intentions* の ‘The Truth of Masks’ を読み始めました。最終的には、*Intentions* に入っている4作品の精髓を徹底的にご指導して下さいました。大変密度の濃い授業でした。内容ばかりでなく、英語の読み方のご指導もよく覚えています。ある日、「ん～？ 今の訳はおかしいんじゃない？ 辞書をよく見てごらん」とおっしゃいました。長時間辞書を見詰めましたが、答えは出てきませんでした。「これはねえ、3行先に熟語の続きがあるでしょう」と教えて頂いた時、英語の長文の構造について、はっとさせられました。

ワイルドがシェイクスピアの衣装について述べている ‘The Truth of

Masks' を読んで以来、自分の興味あるテーマを論じることの面白さを学んだのは事実です。今、私はシェイクスピアと医学について研究中ですが、原点にあるのは澤井先生の授業と言っても過言ではありません。先生は様々な形で、私に影響を与えて下さいました。大学で仕事を始めてからは、先生の穏やかな微笑みにお目にかかるのを毎回楽しみに致しておりました。先生と酒席を共にした折、先生が長年お勤めになられた実践のことをいかに愛しておられるか力説されていたのも思い出されます。実践の卒業生として先生のお言葉は胸を打つものがございました。先生が退職されるのは非常に寂しく残念なことで、今後ともご指導を賜りたく存じますが、今は先生に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

The Professor and His Soul

英文学科助手

井上尚美

一週間の真ん中である水曜日のお昼休みは、教室の中もざわついていました。やがて3時限目を告げる鐘が鳴り、教材を片手に携えた澤井先生が扉を開けて入ってきて、教室の中は落ち着きを取り戻します。

「イギリス文学演習Ⅱ」の授業の始まりです。

テーマは19世紀末のイギリス文学で有名なオスカー・ワイルドの短編小説 *The Fisherman and His Soul* を読んで、ワイルドの美を探ることでした。

私がこの授業を履修していたのは大学3年の時で、作品の雰囲気や察する気があるのかないのか、毎週水曜日の天気はさっぱりとした晴れであることが多かったように思います。

それでも作品の概説や訳を読み上げる先生のゆかしい声は、物語の情緒とリンクして、3館3階の教室を独特な世界へ誘っていました。その世界は、漁夫と彼の魂と彼の海の気配が積み重なり、作中の町や人や様々な価値あるものが色を加えて形成されていくのです。そんな中、時折作品の注釈から話が逸れて、例えば作中に裸足の踊り子が出てくることから最近のファッションについて学生に質問なったり、作品のテーマが「一番価値あるものは愛である」ということから話題が恋愛に及んだりもしました。作品の内容に触

れている間は静かに流れる空気も、こういった時にはほんと和やかになります。これをゆったりとしたテンポで繰り返していたので、あの90分の間に19世紀末のワイルドの世界と21世紀初頭の日本の女子大での演習を行ったり来たりしているようでした。

あれから数年が経ちました。澤井先生もご講演された「オスカー・ワイルドと演劇」のシンポジウム開催をきっかけに、再びあの物語を読み返してみました。当時は物語を理解しているつもりでしたが、今思い返してみるとやはりその理解は拙いものだったように思います。5年後、10年後、更にもっと経てば、この今のこともそう思っているのでしょうか。そして願わくはその頃にまた、澤井先生にワイルドとこの作品の魅力についてお話しいただけたらと思います。

澤井先生との出逢い

英文学科助手

梅原 ひろ乃

澤井先生を最初にお見かけしたのは、私が実践女子学園中学校1年生の時でした。当時、澤井先生は理事長先生をされていたらしいです。入学式の時、そして実践女子学園創立100周年記念式典が開催された時に、壇上で穏やかにお話をされていたのを今でも覚えております。あの時から10年経った今、何の偶然をなしてか同じ英文学科の職場で働かせていただいております。澤井先生は、ご出講された際いつも最初に助手室にいらっしやいます。澤井先生の「おはよう。」の一言で助手室の雰囲気が和みます。いつも澤井先生がコーヒーをすすりながら何かお話をされるのを密かに楽しみにしておりました。

澤井先生と杯をかわした時もあります。様々な興味深い話をお伺いすることができましたが、その中で一番印象に残っていることは、4月にあった英文学科の職員歓送迎会で「今でも4月初回の授業に行く際は大変緊張する。」とおっしゃっていたことです。学園の行事毎に大勢の前でお話をされていたのを拝見しておりましたので、大変驚きました。(それと同時に職場に入りたてだった私の緊張もほぐれました。)澤井先生の様々な経験談や苦労話も何

いましたが、やはり感じることは「澤井先生の実践女子学園への思い入れは誰よりも深い」ということです。いつも穏やかな澤井先生が実践女子学園の話に及びますと、とても熱心に語られていらっしゃったことが心に残っております。

そんな澤井先生のご退職をされることはすごく寂しいですが、それと同時に感謝の気持ちが湧き上がってきます。私事にはなりますが、私は澤井先生が理事長先生をされていらっしゃった時代から実践女子学園にお世話になっておりました。単純な言葉にはなりますが、澤井先生のお蔭様で素敵な親友ができ、楽しい学校生活を送ることができました。このことは、私の中学校時代からの同級生皆が同じ気持ちであると確信しております。澤井先生、私の学園生活の最初に中学校の壇上でお見かけをして、澤井先生のお勤め時代の最後の1年間に同じ職場で働かせていただいて嬉しかったです。お世話になりましたどうもありがとうございました。これからもまたご一緒にお酒の席を囲めましたら光栄です。



英文学科教員一同